

【暗証聖句】

「わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった。すると、その方は右手をわたしの上に置いて言われた。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。」ヨハネの黙示録1章17節

【日・封印された墓】

イエス様が十字架にかかって死なれた後、墓に葬られましたが、その入り口は大きな石で封印され、その前にローマの番兵が立ち見張っていました。祭司長や長老たち、すなわちイエス様を十字架にかけるように要求したユダヤの指導者たちは、何かが起こるのではないかと恐れたからです。一体彼らは何を恐れたのでしょうか。イエス様が生前、ご自分が三日目に復活すると繰り返し預言していました。このことは彼らの耳にも入っていました。イエス様が三日目に復活することを告げられた箇所を見てみましょう。

マタイ12章40節「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になる。」

マタイ16章21節「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」

マタイ17章22節「一行がガリラヤに集まったとき、イエスは言われた。「人の子は人々の手に引き渡されようとしている。そして殺されるが、三日目に復活する。」弟子たちは非常に悲しんだ」

イエス様の復活など、彼らが信じたり、認めたりするわけにはいきませんでした。しかし、このただならぬ墓の防衛を見ると、彼らが相当、恐れていたのは確かです。あるいは弟子たちが遺体を盗むことで、イエス様が復活した主張するのではないかと考えました。いずれにしても、備えておくことに損はない、そう考えたのでしょう。

墓の前に置かれた大きな石、そして屈強な番兵。もしイエス様のなきがらを盗もうと思っても、弟子たちには不可能な状況でした。しかしこのことが逆に、皮肉にもイエス様が復活したことを証明することになったのでした。人手によらず動かされた墓の前の石と空になった墓。弟子たちがこれをするのは不可能だった。つまり、無言のうちにもそれは、主の死と悪の軍勢に対する勝利を告げることになったのです。

【月・主はよみがえられた】

エレン・G・ホワイトは、サタンがイエス様を十字架にかけて殺すことに成功したとき、イエス様が復活されたときの様子を次のように描写しています。

「イエスが墓の中に横たえられたとき、サタンは勝ち誇った。彼は救い主がふたたびよみがえられないようにとさえ望んだ。彼は主のからだを要求し、墓のまわりに番兵を配置し、キリストをとりことしてとじこめておこうとした。彼は、悪天使たちが天の使者の接近とともに逃げ出したとき、激しく怒った。彼は、キリストが勝利のうちに姿を現わされたとき、自分の王国が終わり、自分はずいぶん死なねばならないことを知った。」各時代の希望下 P314

サタンの勝利の喜びはつかのままでした。十字架の三日後には完全な敗北を知ることとなるのです。イエス様の復活が、自分の王国の終わりとの死に運命を悟ったのでした。イエス様が復活した時の様子を見言葉から見てみましょう。

マタイ28章2節

「すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである」

ここに墓の前に置かれた大きな石を動かしたのは天使であることが書かれてあります。そして、「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白く、番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった」(マタイ28:3,4)とあり、復活を妨ごうとした人間の努力は、天からの使いの前に、全く無力で愚かなことが証明されたのでした。その後天使は、イエス様の体に香油を塗ろうとやって来た婦人たちの前に現れてこう告げます。

「あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい」(マタイ28:6)。

ルカ24章5節では、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか」と語る天使の言葉も記録されています。イエス様のなきがらが墓の中に無いことを確かめると、婦人たちは一目散に弟子のもとに戻ります。その途中で、何と、復活されたイエス様が、行く手に立っていて、「おはよう」と言われたのでした。「婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した」と記録されています(マタイ28章9節)。

【火・多くの者たちが彼と共によみがえった】

マタイ 28:50～52「イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起り、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。」

イエス様が十字架で死なれた時、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたり、地震が起こったり、岩が裂けたりなど、驚くべき現象が次々に起こりました。その中でも注目すべきは、「墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った」ことです。彼らは一体何者で、何人くらいいたのかなど詳しいことは何もわかりません。分かることは、彼らが聖なる者たちであったということ、そしてマタイ 27 章 53 節を見ると、彼らは、「イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」ことです。彼らは、死とよみに対するキリストの勝利を記念する者として、主は復活させてくださったのです。また各時代の希望下 P317 を見ると、彼らはラザロやヤイロの娘のように再び死ぬ体で生き返ったのではなく、永遠の命に復活したと書かれてあります。

「キリストの復活のときによみから出て来た者たちは永遠の生命によみがえったのであった。彼らは、死とよみに対するキリストの勝利を記念する者として、キリストと共に昇天した・・・これらの人たちは都へ行って、多くの人に現われ、キリストが死人の中からよみがえられ、われわれはキリストと共によみがえったのだと宣言した。こうしてよみがえりについての聖なる事実が不滅のものとなった。」各時代の希望下 P317

ところで、この聖なる者たちが復活したタイミングは、イエス様が十字架で死なれた時でしょうか、それとも復活されたときでしょうか。マタイ 27:50～52 を見ると、イエス様が十字架で亡くなったときに生き返ったように書かれてあります。しかし、「御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です」(コロサイ 1 章 18 節)、「今や、キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂となりました」(コリント一 15 章 20 節)とある通り、キリストよりも先に復活したとなると順番がおかしくなります。マタイ 27:53 節を見ると、「イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」とあるとおり、イエス様の復活まで墓の中にいたことがわかります。実は、「生き返った」と訳されているギリシャ語動詞エゲイローは、いつでも復活を指すわけではなく、「(穴から)引き出す」とか、「起き上がる」となどの意味もあるので、イエス様が死なれたときに発生した大地震により、墓から聖なる者たちの骨が飛び出し、イエス様が復活されたとき、後に続くように彼らも復活して墓から出てきたと考えられます。重要なことは、いずれにしても、彼らがイエス様の勝利と栄光の証として復活したということです。

【水・よみがえったキリストの証人】

イエス様は復活された後一旦昇天され、その後、天国と地上と行ったり来たりするような感じで、500 人以上もの人々の前に現れました。最初は皆、驚いたことでしょう。しかし、すぐに喜びが突き上げ、イエス様が死に勝利されたことを知ります。復活の事実は彼らを勇気づけ、福音を携えて彼らの足を世界へと向かわせたのでした。イエス様は復活された直後に婦人たちの前に現れましたが、その後 12 人の弟子たちの表れ、さらに 500 以上のものたちに何と同時に現れます(コリント一 15 章 6 節)。肉体を持っていたなら、ありえないことです。そして、イエス様の兄弟ヤコブやパウロにも現れました。この二人の共通点はイエス様をはじめは信じていなかったと言うことです。このように次々に復活されたお姿を人々に現わされる中で、イエス様がトマスに言われた言葉は有名です。

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」ヨハネ 20 章 29 節

イエス様が弟子達の前に現れたとき、その場にトマスはいなかったために疑ったのです。そんな疑い深いトマスの前にもちゃんとイエス様は現れてくださいました。そのとき言われたのが、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」でありました。私達も復活されたイエス様を見ていませんが、「たとえ死んでも生きる」と信じています。それは幸いなことだとイエス様は言われていることを覚えたいと思います。

【木・眠りについた人たちの初穂】

コリント一 15 章 20 節「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました」

「初穂」とは、その年に畑で収穫される最初の作物を差し、旧約聖書の時代には神に対する感謝の供え物としてささげよう定められていました。また、それが動物に適應される場合には「初子」と呼ばれ、それも神への供え物として扱われました(レビ記参照)。

しかし、新約聖書においては、復活のキリストに対し、或いは主を信じる人々に対して、この「初穂」ということばが使われています。そこには、霊的な意味として、「時間的に最初のもので、後に続くものを質的に保障する」という比喩が込められています。イエス様が初穂であるとは、主を信じて従う私達も、初穂であられる方に続いて復活のいのち(永遠のいのち)に生かされること、すなわち死が終わりではない世界に入れられていることを表します。この復活の希望こそ、私達たちが今日を生きる力、明日への期待と保証の土台となります。